

「ひとが否定されないルール」

日木 流奈

・私は知らないことを恥じたりはしません。ですが、知ろうとしないのは恥ずかしいことです。見て見ぬふりをするのはとても恥ずかしいことです。

・でも、それは、常識はずれをしろと言ってるのでもなく、また、今やってることをやめろと言ってるのでもありません。どこにいても、＜自分の思い＞がどこにあるかを問うて生きたとき、どこにいても、だれといても、心が平安になると伝えたいのです。

この＜自分の思い＞というのを、自分自身にきけばいいと言われても、「わからない」と答える人がたくさんいることに私は気づきました。自分が何をしたいのか、どうしたいのかが自分でわからないのです。人からの評価ばかり気にして生きてきたために自分の心のありかたがわからなくなっているのです。

・「平等」という言葉は、時として人を大きく勘違いさせることがあります。同じ時間、同じ量のことを、同じようにしなければ平等だといわないとしたら、この世はもっとおかしくなってしまうと思います。私は平等というのはそれぞれの人が必要な時間、必要なだけ、その人にあったやり方で接してもらえることだと思っているのです。ですから、世の中で言う「平等」がおかしく感じる時があるのです。

・平等という言葉に惑わされて、人生の先輩たちに敬意を持たずに話すことも失礼だと思います。大人も子供も互いに尊重しあい、お互いを知ろうとする気持ちで向かい合ったとき、それこそが平等の一步を踏み出すことではないかと私は思っています。親子関係にかぎらず、国と国、人と人が接するとき、すべてにこのことは当てはまると思うのです。

まずは身近な例から始めて、広い世界へと目を向けていったとき、それぞれの生き方を尊重できる本当の平等な世界がやってくるような気がします。

・～～～一つ一つの回を重ねることで、私たちは、いろいろな人に自分たちの思いを伝えるすべを学びました。ほんの数回で私たちの意向をくんでくれるところもあれば、何度もやりとりしなければならぬところなど、様々でした。そのやりとりの中で、相手との距離を埋めることは、とても大切な気がします。どうしても相手との距離を埋められないときは、それぞれがそれぞれの場で生きていけばいいだけで、自分の思い通りに相手を動かそうとしなくてもいいのだと思うのです。距離を埋める努力をしてダメなときは、そのときの学びをしっかりとするだけだと思っています。

・道徳的にいって、人はいろいろなことに感謝しなければならないと言う教えがあります。・・・感謝とは、わき上がるものではないかと私は思っています。・・・でも、どうせなら、言葉の本来の威力を発揮させるために、心からの感謝を送りたいものです。

・人は自分が人にしてあげたことに対して、「してあげた」という思いから離れることができずに、そこに依存してしまうことがあります。されたほうも、「してもらった」ということに気をとられ、お返ししなければならぬとか、感謝しなければならぬとかそう

いったことにとらわれ、苦しんでいる。お互いに、してあげた、してもらったという思いを手放せたとき、単純に喜びを分かち合う関係が生まれてくるように思います。

・人と人の関係は相互関係ですから、できるなら、子供を育てることが喜びとなるように、生徒を育てるのが楽しみとなるように、部下が育つのを幸せに感じるようになっていったらいいですね。そういった心が自らあふれ出すとき、人は誰かに感謝されなくても、何が起きても、すべて自分のことにとらえることができ、感謝があふれてくるものだと思います。

・一方通行の会話は、会話とは言わないんです。どんなときでも尋ねることができければ、そこに強い人間関係が生まれ、お互いを尊重しあい、決して生徒は先生を困らすことをしなくなるでしょう。

・自分の子供に対してどう接するか。ズレてしまったとき、いつでも修正できるように彼らはいつでも自分たちを見直すのです。そして、子どもたちが育とうとする力の邪魔をせず、最大限見守り、必要な手助けは惜しみなくできるかが彼らのテーマです。導き手である大人たちが、そういったおもいで子どもに接してくれたなら、子どもは呼吸をするように楽に生きられるようになり、夢をどんどん実現させていくでしょう。

・ひとが自分の思い通りにならないことで悩む人が、もっと自分に焦点を当てさえすれば、他人を変えてやろうというのはおごりでしかないということに気づけるのです。そして、常に自分に問うて生きるようになったとき、心の平安が訪れるのです。

・何げなく過ごしている日常に、偏見や差別、そして戦いに向かう人の悲しい性が隠されています。

意識的に生きること。常に自分にといつづけること。コミュニケーションの最たるものがここにあります。

己に問う。それができるようになるために、心を伝え、聞く会話が子どもの時からなされていたら、こんなステキなことはありません。

・ここで大切なのは、自ら気づいていくことなのです。だれかにもたらされるものであってはならないのです。こうすることがいいことだと言われてやることは、今までと同じです。誰かの評価のもとに生きていては、個として存在する意味がありません。それぞれの人が個として生きていくことで、すべて違いがあるだけなのだとして了解することが重要なのです。そして、それらが結びついて、地球は<わ>として成り立つのです。

・人と関わるなら、自分がきちんと自己の宇宙の中心にいられるのを手助けしてくれる人とつきあいたいものです。ただ、評価したり、批判する人とつきあうより、互いによりよく生きることを目指し、補い合う関係でいたいものです。

・運命を受け入れるということは、ただ起きたことを受け入れて、何もしないということではありません。生きていく人にとって、運命をうけいれるということは、とてもアクティブなものでなければなりません。他力である部分と自力である部分のバランスがとれたとき、そこには何が起きても動じない新たな平安が生まれると私は思っています。

・「しかる」という言葉の意味をしっかりと認識したとき、それは経験の豊富な人が、物事をきちんとできない途上のものを手助けすることだと私は思うのです。そのために、その時その場その状況で、やってはいけないことや、まだしらなかったルールを指導するために、時としてしかるということが起きるのだと思うのです。

では、「怒る」とは、たぶん、もう一つ特別な感情が含まれると私は思っています。

・「ありがとう」の響きは大変心地よく、言った人も言われたほうも、お互いに自然に感謝しあってしまう、そんな響きです。

・わたしが学ぶことが楽しかったのは、毎日やることではありましたが、強制されたり、長い時間拘束されてやったのではないからです。そして、テストもされませんでした。その心地よさ、試されない心地よささえそろっていれば、親も子も楽しめる状態ができます。指針は<心地よさ>です。

ありがとうといわなければならないのではなく、心から思えるような状態をつくること。これが大事なのだと思います。これも<似て非なるもの>です。

・方法に目が行きすぎると、伝えようとする人の心を受け止めづらくなります。学ぶことはいけないことではないのに、早くから学ぶと心が育たないとか、競争して、いい学校にはいると、心が萎えるとか言う話になります。それはある意味で事実であり、別の意味で事実ではありません。問題は心なのです。

・もちろん、世界は動き、現在、世界がどのように動いているかを知ることは大切です。その礎に歴史がどのようにあったかを知ることは、とても大切な気がします。

私は、歴史の年号を覚えることより、その時代に生きた人々が何を思い、どのように生きてきたか、そして、戦いの歴史はなぜおこっているのかを真剣に話し合うほうが、学びとしてはとても有益だと思っています。

・結論は、「今その時から始めなければならない」ということです。この瞬間を始まりとするのです。過去はすぎたことで、今その傷ついている大人たちに必要なのは、自らを癒し、本当の意味で独立と共存を学ぶことだと思うのです。

・<わ>という言葉が私の中に響き渡ります。<わ>、輪っかの輪、平和の和、循環の環、それらがすべて地球の営み、ひいては宇宙の営みを表していると、すでに人は知っているはずなのです。なのに、実際の生活では、その<わ>を崩すことばかりに力を注いでいる

のです。

・人は何かにつけて上下をつけたがります。誰か自分より下の人を見つけないと不安でしょうがないようです。自分が少しでも上であることで、心の安らぎを得ようとしています。ですが、そういう人は、いつまでたっても不安を抱えているでしょう。自分よりしただと思っただ人から反発されたり、能力が下だと思っていた人のほうが上になったと思ってしまうたりと、いつまでも不安を抱えていることでしょう。

・人はあまりに自分の心に鎧をつけすぎて、魂の喜ぶことをどこかに置き忘れたかのようです。もっと純粹に自分がどうしたいのかを語ればいいのです。

・私は、世界はつながっているといつでも感じています。＜わ＞を感じています。だからこそ私は、私のところはまず幸せにして、いい状態にしようと心がけています。そして、その思いがめぐってきたとき、さらにその幸せな状態が増えていることが大事だと思うのです。私が今ここでどんどん幸せになっていくことは、世界を幸せに導いているという自覚があるのです。そして、もしこれを各人が責任を持ってやりさえすれば、世界中に幸せが伝達できるのです。大人たちが知りたがっている、＜理由なき幸せ＞を実現できる人たちが増えれば、悲しんだり怒ったりしながらも心の深い部分が平安で幸せでいられるのです。人生を楽しむコツが見えてくると、ただ嘆いたり憂えたりするのではなく、どう生きていくかが見えてきます。

・「脳障害＝かわいそう」とか、「親は一度落ち込まなければならぬ」という、世間の思いこみを外すのは、結構大変な作業です。また、「脳障害＝知的に劣っている」魚も鰐込みに対しても同じです。

・今度は、「賢いことがいいことだと思っているのかしら、この子は」という批判にあうことがあります。確かに、知識だけの人間は魅力的でないかもしれませんが、子どもというのは発展途上の人間なのです。それを温かく見守り育てるのが大人の役目なのに、批判しかしないとしたら、その大人こそ、未熟であると私には思えるのです。

2004, 2 / 16